

2018年度

ジョイント・リサーチ I・II  
説明会用シラバス

開催日時

2018年1月10日 (水)

5講時・6講時

MK302教室

※この冊子を持参して必ず参加すること

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 002**

**テーマ名：ビッグデータからの知識発見  
～経済・社会データの分析を通じて～**

**担当者名：波多野 賢治，宿久 洋，深川 大路**

### **<概要>**

近年、実社会で取り扱われるデータは大量化・複雑化している。計算機を用いれば、100万～1,000万件程度は何事もなかったように扱えるが、それ以上になると計算機のメモリ上にデータを保持することが困難になることがある。また、対象のデータ数に比べ、変数の数が非常に多いデータや変量間・対象間に構造が存在するようなデータも存在し、その分析の必要性も増している。このようなビッグデータには一般的な統計解析法の適用は困難であり、情報科学・統計科学の共同の取組みの中で新たな手法の提案がなされつつある。

本リサーチでは、このようなビッグデータの取得・生成・処理・解析の方法について学び、経済や社会の実データの分析、検討を通して、実践的なデータ処理/解析の能力を身につける。この取組みの中で、課題設定・分析実施・結果評価・再分析実施を繰り返すことで、データ分析に基づく問題発見解決能力を涵養すると共に、経済・社会データの分析に関する素養を経営科学系研究部会連合協議会主催のデータ解析コンペティションへの参加を通じて高める。

### **<到達目標>**

実践的なデータ処理・解析の能力を身につける。

データ分析に基づく問題発見・解決能力を身につける。

### **<授業計画>**

ジョイント・リサーチⅠでは、データ解析コンペティションに参加するために必要な知識である、ビッグデータの処理方法、およびそのデータを用いた解析手法の能力を身につけるため、前半はプログラミング言語を用いたデータの生成法やデータベースシステムを用いたデータの管理法を、後半は与えられたデータに対する一般的な統計解析法に関する知識を実践的に身につける。

ジョイント・リサーチⅡでは、受講者を複数のグループに分け、グループごとに役割分担を決めた上で、受講者がその役割を果たすべくデータ解析コンペティションから与えられた課題に取り組む。配布されたデータからデータの取得、管理、そして分析を行い、最終的には成果報告会において分析結果の報告を行う。

### **<成績評価基準>**

出席20%，平常点20%，小レポート20%，中間報告会20%，成果報告会20%。

### **<テキスト>**

講義内容は随時プリントとして配布する。

### **<参考文献>**

講義中に指示する。

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 007**

**テーマ名：言語生態とGIS**

**担当者名：沈力・川崎廣吉**

### **<概要>**

如何にGISの方法論を用いてことばの分布状況を把握するのかを中心にリサーチ活動を行う。この授業では、まず日本語の音韻システム、形態活用及び文法の記述方法を学び、日本における諸方言のデータをもとに演習を行う。一方、NASA衛星システムから地理情報をQGIS、GLASSで解析し、さらに、言語現象を地理情報と重ねて観察することを学ぶ。最後に、共同研究チームを結成し、教員の指導のもとで、提供されたデータベースに基づいて興味のある日本語の方言の音韻、語彙、文法の諸現象を取り上げ、それらの言語現象はどのように分布しているのか、その分布から何が読み取れるのかについて議論する。学期末には、問題となる方言の音韻、語彙、文法のどれかの特徴について発表し、レポートを提出することにより成績評価を行う。

### **<到達目標>**

歴史的文献に基づいてことばの共時的分布を通時的に順序づけることによって、言語伝播の足跡を明らかにする。さらに、言語伝播に関する仮説は地理情報システム(GIS)という科学的手法によって検証されうることを期待する。

### **<授業計画>**

ジョイント・リサーチⅠでは、①国立国語研究所の方言データを、形態的・音韻的特徴に基づいて分類し、各タイプの分布を地図上に示す。さらに、②NASAの衛星システムの地理データに基づき、日本の地形条件と結び付けて分析する。最後に、③リサーチ・グループの研究を通して方言分布に関する可能な仮説を提案する。

一方、ジョイント・リサーチⅡでは、①歴史文献に基づいて方言現象の祖形を再建することを学ぶ。その上に、②人間の移動コストの計算法を学び、それに基づいて方言地域同士の遠近関係を明らかにする。最後に、③リサーチ・グループの研究を通して、方言伝播の方向と足跡を明らかにする。

### **<成績評価基準>**

出席率による評価：50%

発表による評価：6%

レポートによる評価：44%

### **<テキスト>**

授業中配布。

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 010**

**テーマ名：メディアの転換とトレンドの創造**

**担当者名：田口哲也・山内信幸・石岡学**

### **<概要>**

現代には様々な表現メディア（＝表現媒体）が存在する。例えば「文字」という表現メディアを「イメージ」や「音声」という別のメディアへ、あるいはその「イメージ」や「音声」というメディアを組み合わせることで「音声を伴う動画」というメディアに転換すると伝達内容（＝メッセージ）は変化するだろうか。もし、変化するとすれば、その変化はどのようなメカニズムのもとに起こるのだろうか。このクラスでは現代的な文化的コンテンツ、例えばポピュラー・カルチャーや、観客スポーツ、都市伝説、そして移動を伴う集団の文化などを対象にしてグループ研究を行う。研究テーマの選び方、データの収集、分析、評価の方法を実践的に学習し、最終的には各種の文化理論などを用いてトレンドがどのように作りだされていくかも考察する。

### **<到達目標>**

特定の文化現象の表現媒体としての特性とその伝達様式の特徴を記述し、具体的な研究テーマを設定して、計測を含めた科学的な研究方法を身につけることができるようになる。

### **<授業計画>**

I では、まず「図像、音楽、映像などのメディア・ミックス」、「流行語、うわさなどを中心にした物語（ナラティブ）文化」、「モデル理論の検討」、などの講義を行い、表象文化、都市伝説、社会学の理論研究などの専門知識を身に付ける。続いて徹底的なグループディスカッションを通して人文科学の研究方法を学ぶ。II では、I で決定した研究テーマに基づいたグループ学習を行う。研究計画書を作成し、計測や計量、印象評価実験など、データを収集する方法を検討したあと実際にデータを収集して、集計・分析を行う。中間発表のあとの修正を経て、最終発表を行う。

### **<成績評価基準>**

平常点（出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等）50%  
期末レポート試験 50%      ともに独創性を高く評価する

### **<参考文献>**

福田忠彦監修、『人間工学ガイドー感性を科学する方法ー』

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 011

テーマ名：文化遺産の非破壊探査とリモートセンシングの応用研究

担当者名：杉本裕二・津村宏臣・岸田徹

#### <概要>

文化遺産を調査する方法は、破壊調査と非破壊調査に大別される。このジョイント・リサーチでは、遺跡発掘調査などの大規模な破壊調査とは別に、非破壊調査の概要や方法について学び、その実践から得られる様々な情報の処理などを実習する。広い意味で、リモートセンシングの応用について具体的に学生が研究できるよう、次の3つを主題とする。

- ・人工衛星リモートセンシングデータのデータ処理と画像演算処理による、地表面文化遺産の探索と評価
- ・地中物理探査の手法(磁気・電気・レーダー)による、地下文化遺産の探索と評価
- ・受講生自ら探査(補助)機器を作成し、それを実際に用いた調査と評価

#### <到達目標>

受講生が文化遺産調査の現場や文化遺産調査情報に接する際に、その情報発生背景に遺跡や遺産の破壊がどのように関わっているのかを理解することができる学術的基礎を持つ、非破壊調査の多様な手法を理解した上で、応用や適用が可能となる技術と方法を学び、破壊・非破壊の調査方法で得られた多様な情報を統合して“文化遺産の姿”を描く専門家やその“調査マネジメント”の専門家を養成する。

#### <授業計画>

- 1～2 回目 文化遺産の調査方法・調査情報についての概論
- 3～5 回目 非破壊調査方法概論
- 6～10 回目 グループに分かれて文化遺産調査/情報処理演習
- 11～13 回目 リサーチ内容に関する総合化演習
- 14～15 回目 リサーチレポートの作成・報告

#### <成績評価基準>

- 平常点(出席, 講義中でのディスカッションへの参加など) 30%
- グループ演習への参加と成果 40%
- リサーチレポートの作成と報告 30%

#### <テキスト>

講義時に資料を配付する

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 012

テーマ名：経済・金融データの分析・評価、及び経済を含めた様々な現象の予測・評価

担当者名：川崎 廣吉・浦部 治一郎

### <概要>

株価や企業のバランスシートのデータの分析を通してより実務的な能力を身につけるとともに、株価の変動や企業活動が現代社会にどのような影響を与えてきたかを、文化情報学的な立場から考察することを目標とし授業をすすめる。また、日常では馴染みにくい金融についてより深く理解するために日銀主催の日銀グランプリに参加し、各自が金融を身近に感じることができるよう授業の展開を行う。

### <到達目標>

この講座では、自らが進んで未来を創造する力を身につけること最大の目標としている。研究を進めていく為に必要なツールを学び、更に経済・金融データを文化情報学的な立場からみることにより文理の枠にとらわれることなく、より多角的な研究姿勢を各自が身につけ、各自が今後の卒業研究・就職活動等に活かしていくことを目標とする。

### <授業計画>

この授業では学生同士はもちろん、教員と学生とのジョイントも積極的に行い授業を進めていく。受身的な授業ではなく、受講生自らが積極的に授業に参加し、各グループ内やグループ間での意見交換を重ねながら授業を進めていく。受講生は、この授業を通して共同作業の大切さや楽しさを学び、またプレゼンテーション能力やディベート能力も身につけることが出来る。

前半：日銀グランプリへの投稿原稿の作成を中心に、簡単な分析方法も復習する。

後半：ディベートを通して、プレゼンテーション能力や資料をまとめる能力を養う。後半は、来年度の就職活動を意識し各自興味がある業界について様々な角度から分析、評価を行い、各自レポートにまとめ提出する。

### <成績評価基準>

平常点55%、レポート15%、発表30%

### <テキスト>

白砂堤津耶 『「例題で学ぶ」初歩からの計量経済学』（日本評論社、2007）

### <参考文献>

秋山裕 『Rによる計量経済学』（オーム社、2009）

津田博史 『株式の統計学～シリーズ<社会現象の計量分析>～』（朝倉書店、1994）

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 015

テーマ名：マルチモーダルインタラクションの動的構造  
-コミュニケーションを科学する-

担当者名：伊藤紀子・阪田真己子

### <概要>

従来の言語学や社会学，心理学の研究では，人のコミュニケーションに関して言語と非言語に二分して論じられてきた．とりわけ，言語がわれわれの意思を意図的に伝達する手段として重点が置かれることによって言語学が発達してきたため，言語によらない情報伝達手段は非言語として区別されることとなった．しかし，近年では，人の深層部分では統語的思考とイメージ的思考が未分化な状態にあり，それが一方は音声チャンネルを通じて「ことば」として，他方は身振りチャンネルを通じて「みぶり」として表層に発現するとされている．したがって，言語・非言語の両者を視野にいれた上で，それらがどのようにしてコミュニケーションを構築しているかを考える必要がある．

これらの問題意識を踏まえて，本授業では，人と人とのコミュニケーション場面において，表現主体（会話参与者）の心的状態，思考過程について言語・非言語の両面からアプローチし，両者の統合，相補関係を検討することをねらいとする．

キーワード：コミュニケーション，多人数インタラクション，会話，パラ言語，ジェスチャー，間，フィラー

### <到達目標>

1. 人と人とのコミュニケーションに関わる現象を多角的な視点から理解する．
2. グループワークを通して，研究計画の立案，実験デザイン，実験実施，データ抽出，データ集計・解析・考察・成果発表・レポートという一連の研究手順を習得する．

### <授業計画>

ジョイント・リサーチⅠ（春学期）

コミュニケーションおよび多人数インタラクションに関わる基礎的な分析手法を講義と演習により習得する．

ジョイント・リサーチⅡ（秋学期）

グループ単位で研究の立案から最終成果報告までを行う．

### <成績評価基準>

- ・平常点（出席，クラス参加，グループ作業の成果，発表等） 30%
- ・提出物 30%
- ・期末レポート 40%

### <テキスト>

特に指定しない．授業にて適宜資料を配付する

### <参考文献>

『多人数インタラクションの分析手法』坊農真弓，高梨克也共編，オーム社(2009)

**授業名：**ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 016

**テーマ名：**認知のクロスモーダル性から文化を考える

**担当者名：**杉尾武志、星英仁、大塚幸生

**<概要>** さまざまな文化現象を人間がどのようにとらえているのか（認知しているのか）を明らかにすることは、文化の生成や継承を考えていく上で必要不可欠である。この問題に対して認知科学的な立場から考えていくためには、複雑な文化現象をどのように分類できるかをまずは検討する必要がある。近年、感覚や認知におけるクロスモーダルな特性がさまざまな側面から注目されている。本ジョイント・リサーチでは、感覚間の相互作用が文化現象に対する認知に与える影響について、認知科学的な手法を基に明らかにすることを目指す。

**<到達目標>** 多感覚情報の統合のメカニズムに基づいた文化現象の理解および説明ができるようになる。

**<授業計画>** ジョイント・リサーチⅠでは、文化的対象を多感覚情報という視点からどのように分類することが可能かについて、大きく4つのトピックについて実習形式で授業を行う。作業はグループに分かれて行い、得られた結果についての発表会を実施する。

ジョイント・リサーチⅡでは、グループ単位で研究計画の立案・実施・分析・発表を行い、特定の文化的現象について多感覚情報の処理という観点から理解を深める。

### **<成績評価基準>**

平常点（出席およびグループ作業に対する取り組み） 50%

レポート（Ⅰではトピックごとに、Ⅱでは期末レポート） 40%

発表 10%

### **<テキスト>**

### **<参考文献>**

**授業名：ジョイント・リサーチ I・II 017**

**テーマ名：文化・社会領域におけるデータ分析の活用法**

**担当者名：金 明哲、鄭 躍軍**

### <概要>

本授業では、履修生に統計的思考および実用性の高いデータサイエンス手法を理解させ、その方法を用いて文化現象や社会現象を分析する技能を修得させる。履修生は、関心のあるテーマを選定した上で、グループごとのメンバー間の連携により文献サーベイ、意見交換、データ分析、成果発表などの共同作業を行う。このことを通して、一人ひとりが問題意識、データの様々な活用方法を実践的に身につけ、共同研究の進め方を理解させる。

### <到達目標>

前期のJR I では、グループごとに典型的なデータ分析法を取り上げ、関連する文献のサーベイやグループ作業により、諸方法の特徴、適用可能な範囲、活用手順などを理解させる。

後期のJR II では、グループごとに関心のある問題を選定した上で、メンバー間の連携により独自のリサーチを展開するアプローチを身につけさせる。

### <授業計画> ※授業1回分ずつではなく、通常のシラバスよりも簡略に記入してください。

**【前期】**：統計的比較、予測、分類などの方法について参考資料の活用や討論により、基本的考え方を理解した上で、具体的な応用例により分析手順を実践的に理解深め、リサーチの基礎力を養う。なお、授業中に一連の成果を発表する。

**【後期】**：文化現象や社会事象を理解するためのリサーチをプロジェクト形式で展開する。

- ① 意識分析：ワーディング、配列などが意識データの収集に与える影響を、実際の質問作成、実験調査及びデータ解析により理解を深めさせる。
- ② テキスト分析：文学作品、ブログ、ロコミなどのコンテンツなどの統計的分析について学習・研究する。

### <成績評価基準>

授業参加・グループ作業：50%、授業中の発表・提出物：50%

### <テキスト>

必要に応じて、はじめの講義の際に指定します。

### <参考文献>

<http://mj.in.doshisha.ac.jp/R/>

鄭 躍軍・金 明哲(2011)：社会調査データ解析，共立出版

**授業名：ジョイント・リサーチ I・II 019**

**テーマ名：言語フィールドワーク演習**

**担当者名：星 英仁・沈 力・田中 雄**

### **<概要>**

このジョイント・リサーチの目的は、言語フィールドワーク（日本語以外の母語話者へのインタビュー調査）を通じて、言語の記述的・理論的分析をおこなうことにある。扱う言語現象について理解を深め、母語話者の「脳内データ」をどのように引き出すことができるのか体験してもらうことにある。

### **<到達目標>**

言語現象の観察、参考文献探索、言語現象の一般化、インフォーマント・チェックの方法、理論化の方法、理論研究のための統計手法、論文の書き方など、言語研究には欠かせない方法論を身につけることを目指す。

### **<授業計画>**

ジョイント・リサーチ I（春学期）：言語データの観察の方法を学び、グループで扱うリサーチ・トピックを決定する。先行研究を調査し、分析の方向性を探る。グループで発表をおこない、発表した内容をレポートにまとめ、提出する。

ジョイント・リサーチ II（秋学期）：春学期に決定したトピックに基づき、母語話者へのインタビュー調査をおこない、フィールドワークを体験してもらう。得られた結果から言語現象を一般化し、考察する。グループで発表をおこない、発表した内容をレポートにまとめ、提出する。

### **<成績評価基準>**

平常点 40%（出席・提出物）

発表 10%

最終レポート 50%

### **<テキスト>**

授業時に指示する。

### **<参考文献>**

授業時に指示する。

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 021

テーマ名：文化遺産の資源共有（世界遺産）化の方法と技術

担当者名：津村宏臣・杉本裕二・岸田徹

### <概要>

本科目では、世界中で調査研究が進められている文化遺産の様々な調査事例と情報化の現状を理解し、その上で、成果をどのように社会に還元していくか、あるいはヘリテッジとして社会資源化していくのかという、理念と方法、博物館展示技術やそのあり方について総合的に学ぶ。特に、行政・企業・民間団体・メディア・NPOなどと協力をしながら、企画提案型の課題設定、問題解決、実践を学生主体のプロジェクト形式で実践し、Intelligenceとしての資源共有のための情報発信を目指す。具体的に、小豆島を中心とした瀬戸内海地域の世界遺産化の様々な動きと連動しながら、具体的な企画・立案を行い、机上の空論ではなく実際に運用する部分まで進める。

### <到達目標>

受講生は、下記の内容を習得することを目指す。

- ①ユネスコ世界遺産を含めた「世界遺産」の基本的な考え方と日本の現状、メディアの問題などを洗い出し、新しい「世界遺産」のあり方を提言する。
- ②この提言を実施するための産官学民連携の“仕掛け”をプロジェクトベースで企画する。その立案だけでなく、実際の協力機関とともに運用するレベルまで進める。
- ③実際の企画を運用するための技術開発、人材運用、システム設計を実施する。具体的には、現地活動、情報公開、公開技術設計の分野に分かれ具体化する。

### <授業計画>

- 1～3回目 ユネスコ世界遺産および文化遺産の資源共有化に関する概論
- 4～5回目 東瀬戸内文化圏世界遺産化に関する概論と特別講義
- 6～11回目 グループに分かれて、リサーチおよびプロジェクト企画立案の演習・実習
- 12～13回目 プロジェクト企画内容に関する総合化演習
- 14～15回目 プロジェクトレポートおよび運用申請書の作成・報告

### <成績評価基準>

平常点（出席、講義中でのディスカッションへの参加など）	20%
グループ演習への参加と成果	50%
リサーチレポートの作成と報告	30%

### <テキスト>

講義時に資料を配付する

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 024**

**テーマ名：教養としての「遊び」—カードゲームと歌謡の歴史—**

**担当者名：深川 大路・河瀬 彰宏・福田 智子**

### <概要>

私たちが子供の頃に「遊び」の中で身に付けたものは多いだろう。本授業では、その「遊び」の中から、カードゲームと歌謡（音楽）を取り上げる。現代のカードゲームや歌謡曲を端緒として時代をさかのぼり、歴史的に考察することによって、それらの文化を、今後、継承・発展させていく意義を理解する。

江戸時代の歌留多（かるた）を手にとったり、日本各地の民謡を聞いたりして、実際にその物や音に触れる実習を行い、基本的な知識を身に付ける一方、現存する資料から、文字や挿絵、歌詞や旋律などのデータを数理的に分析する。

また、文化の保存と伝承という観点から、富士ゼロックス京都と連携し、授業の成果を広く発信することを目指す。

### <到達目標>

文字の読み書きや歌謡を通して、日本の伝統文化に対する理解を深め、現代社会に継承していく意義・方法を知る。また、大量で複雑なデータを整理・分析する情報科学技術を習得し、データの中から有用な知見を見出すことのできる論理的思考力を身に付ける。

### <授業計画>

春学期はカードゲーム、秋学期は歌謡について、文化史的アプローチによる分析と、現代に生かすシステム構築をおこなう。

#### 【春学期】

- (1)江戸時代の歌留多実見（1回程度）
- (2)変体仮名の読み方（2回程度）
- (3)データベース作成のためのプログラミング基礎習得（4回程度）
- (4)画像・テキストデータベースの構築（4回程度）
- (5)データの分析（2回程度）
- (6)授業成果の発信方法の案出（1回程度）
- (7)グループ発表（1回程度）

#### 【秋学期】

- (1)日本伝統音楽の文化（1回程度）
- (2)日本伝統音楽の歴史（1回程度）
- (3)日本伝統音楽を聴く（2回程度）
- (4)音楽用語の整理（1回程度）
- (5)日本伝統音楽の理論（3回程度）
- (6)楽曲データの作成（2回程度）
- (7)楽曲データの分析（3回程度）
- (8)グループ発表（1回程度）

### <成績評価基準>

平常点（出席，クラス参加，発表，グループ作業の成果等） 50%

期末レポート試験，論文 50%（春学期・秋学期各1回）

<テキスト> 授業中にプリントを配付する。

<参考文献> 授業中に指示する。

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 025**

**テーマ名：江戸時代の暮らしと文化**

**担当者名：矢野 環・福田 智子・高橋 美都**

### <概要>

江戸時代を舞台とするテレビ番組や映画、小説や漫画などで、言葉遣いや生活習慣、美術・建築様式、政治制度などが、史実として適正なものか否かについて検証することを、「時代考証」という。すなわち、現代においては、江戸時代の遺物を手掛かりに、当時の人々がどのように暮らし、また、どのような文化をもっていたのかを推測していくのである。

本授業では、現存するさまざまな江戸時代の文献や絵画をデータとして、数理的な分析をすることにより、そこから、当時の人々の教養や知恵を学び、現代の私たちの暮らしに活かすとともに、後世に継承する意義を知る。

### <到達目標>

江戸時代の史料を通して、芸道（茶道・華道・香道など）・文芸（和歌・俳句・川柳など）・芸能（歌謡・舞踏・演劇など）といった文化に対する理解を深め、その知識や暮らしの中の知恵を現代に継承し、将来に生かしていく意義や方法を学ぶ。また、大量で複雑なデータを整理・分析する技術を習得し、データの中から有用な知見を得ることのできる論理的思考力を身に付ける。

**<授業計画>** 演習は、各グループが芸道・文芸・雅楽チームに分かれて行う。

【春学期】（知識を身に付けることが中心）

- (1) 江戸時代の史料の提示（1回程度）。
- (2) インターネットを使った史料に関する調査（2回程度）。
- (3) グループでの中間発表（1回程度）。（4）新たな史料を加えた調査（4回程度）。
- (5) 別のチームに対する個別レクチャー（1回程度）。
- (6) 調査結果の考察とまとめ（4回程度）。（7）グループ発表（1回程度）。
- (8) 学期末レポートの書き方（1回程度）。

【秋学期】（データを分析・考察することが中心）

- (1) 分析対象となる江戸時代のデータの提示（1回程度）。
- (2) Split Treeの基本的な使い方、出力結果の見方（3回程度）。
- (3) Split Treeを用いた分析（4回程度）。
- (4) 別のチームに対する個別レクチャー（1回程度）。
- (5) 分析結果の考察（4回程度）。（6）グループ発表（1回程度）。
- (7) 学期末レポートの書き方（1回程度）。

### <成績評価基準>

平常点（出席，クラス参加，発表，グループ作業の成果等） 50%

期末レポート試験，論文 50%（春学期・秋学期各1回）

**<テキスト>** 授業中にプリントを配付する。**<参考文献>** 授業中に指示する。

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 027**

**テーマ名：マーケティングデータのマイクロ計量経済分析**

**担当者名：原 尚幸・玉谷 充**

### ＜概要＞

近年、メディアや情報環境の多様化、特にインターネットやスマートフォンの普及に伴い、広告展開の環境は大きな転換期を迎えている。一方、経済に目を向けると、長引くデフレ、少子高齢化などの影響で、消費は長く停滞している。こうした背景の中、企業にとっては、効率的な広告戦略を打ち出すための消費者行動の分析が今まで以上に重要な役割を果たすと考えられる。

このジョイント・リサーチでは、参加者全員が野村総合研究所主催の『マーケティングデータ分析コンテスト』にエントリーをする。そして、そこで提供されるシングルソースデータと呼ばれるデータを使用して、テレビCMやネット広告といった広告が消費者行動にどのように影響を及ぼしているかについて分析を行うことによって、有益な広告戦略の発見を目指す。ここで扱う主要な分析手法はマイクロ計量経済分析、その中でも、特に近年非常に注目されている「因果推論」である。こうした手法のエッセンスを実践的な演習形式で学んだ後に、ブレインストーミングを繰り返しながら、一年かけて成果を目指す。また、グループワーク、プレゼンテーション、資料作成のスキル向上も同時に目指す。

### ＜到達目標＞

マーケティングデータに親しむ。

データの特性に応じたモデリングの能力を身につける。

基本的な手法で実践的なデータ分析を確実にこなせる能力を身につける。

### ＜授業計画＞

授業はすべてグループワークで行う。

ジョイント・リサーチⅠの前半では、シングルソースデータの内容を理解し、過去のコンテストの優秀者のレポートを読みながら、どのような商品の広告効果をどのような視点で分析するかに関して、グループでブレインストーミングを繰り返す。並行して、基本的なマイクロ計量経済分析、特に離散選択モデルや因果推論について学習する。後半では、学んだ手法を用いて、実際に分析を行いながら、有益なビジネス法則の発見を目指す。

ジョイント・リサーチⅡでは、さらに発展的な分析手法を学習しながら、分析をさらに深化させていく。並行して、コンテストに提出するための資料作りにも時間をかける。講義内の最終発表会に向けて、プレゼンのスキルの向上も目指す。

### ＜成績評価基準＞

平常点（出席、グループワークへの貢献度） 50%

レポート課題 30%

成果発表 20%

### ＜テキスト＞

特に指定しない。講義内で指示する。

### ＜参考文献＞

特に指定しない。講義内で指示する。

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 028

テーマ名：現代の音楽のルーツをたどる—音楽文化の解体—

担当者名：河瀬 彰宏・石岡 学

### <概要>

音楽は社会の様々な仕組みの中で成立し、人々の行動様式・価値観と結びつきながら育まれてきた。そのため、ある音楽に対する評価は、音楽の性質だけに還元できるものではなく、そこに付与された社会的意味を切り離して考えることはできない。

本クラスでは音楽理論（近代西洋和声・ジャズポピュラー理論）の基礎を学習した上で、様々な音楽を分析的に聴き、音楽自体の性質に迫る。そして、音楽ジャンルの変容・クロスオーバー・普及という社会現象のレベルまで敷衍して考察し、音楽のルーツを学際的・多面的に把握する能力を身につけることを目標とする。

様々な音楽ジャンルを短期間のうちに扱うため、講義時間外に音楽を視聴・閲覧できる環境が必須である。また、ジャンルを超えて音楽に馴染める精神的態度が不可欠である。一例として、下記のアーティストの半分以上について代表曲・アルバムを挙げられることが望ましい：J.S.Bach, Lv.Beethoven, C. A. Debussy, I.F. Stravinsky, Arnold Schönberg, Iannis Xenakis, 伊福部昭, "Duke" Ellington, Charlie Parker, Miles Davis, John Coltrane, Bill Evans, Elvis Presley, Rolling Stones, The Beatles, Elton John, Pink Floyd, Deep Purple, Queen, Michael Jackson, Mariah Carey.

### <到達目標>

本講義を通して音楽のルーツを学際的・多面的に把握する能力を身につけることを目標とする。

### <授業計画>

春学期は、(1) 音楽理論（近代西洋和声・ジャズポピュラー理論）の基礎を学習したあとに、(2) 近代西洋音楽、(3) ジャズ、(4) ロック、(5) ポップスの順に代表的な音源を視聴しながらその歴史を体系的に学習する。秋学期は、より専門的に各ジャンルの特徴を社会学・経済学・音楽学・情報学の視点から掘り下げて扱い、音楽ジャンルの変容・クロスオーバー・普及を考察するための視座を習得する。春学期および秋学期の後半には、グループ作業による現代の音楽のルーツの分析を実施する。

### <成績評価基準>

平常点（出席・提出物・グループ作業の成果）：50%

期末レポート課題：50%

### <テキスト>

- ・石桁真礼生ほか（1965）『楽典 理論と実習』音楽之友社。
- ・自由現代社編集部（2017）『初心者のためのピアノ・コード講座』自由現代社。
- ・豊富な音源および映像メディアとともにテキストを適宜紹介する。

### <参考文献>

- ・David Byrne (2013) *How Music Works*. McSweeney's Books.
- ・デイヴィッド・コープ（2011）『現代音楽キーワード事典』石田一志ほか（翻訳）春秋社。  
（原題：David Cope (2001) *New Directions in Music*. Waveland Press Inc.）
- ・菊池成孔・大谷能生（2004=2010）『憂鬱と官能を教えた学校』（上・下）河出書房新社。
- ・由比邦子『ポピュラー・リズムのすべて』（勁草書房、1996年）

授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 029

テーマ名：絵解きの文化情報学的研究

担当者名：中安 真理・下嶋 篤

### <概要>

絵解きとは、仏教を説くために絵画などを掲げ、そこに描かれた風景、人物、物語などを口頭で解説することをいう。このジョイント・リサーチでは、絵解きという視聴覚融合の総合芸術を、解説のコンテンツとなる絵画と、解説者のパフォーマンスの両面から調査研究し、絵解き文化の特質について明らかにする。さらに、特定の絵画を用いた絵解きの台本作成と実演を行い、聞き手の行動データをもとにその認知効果を検証し、絵解きのグラフィック戦略を明らかにする。

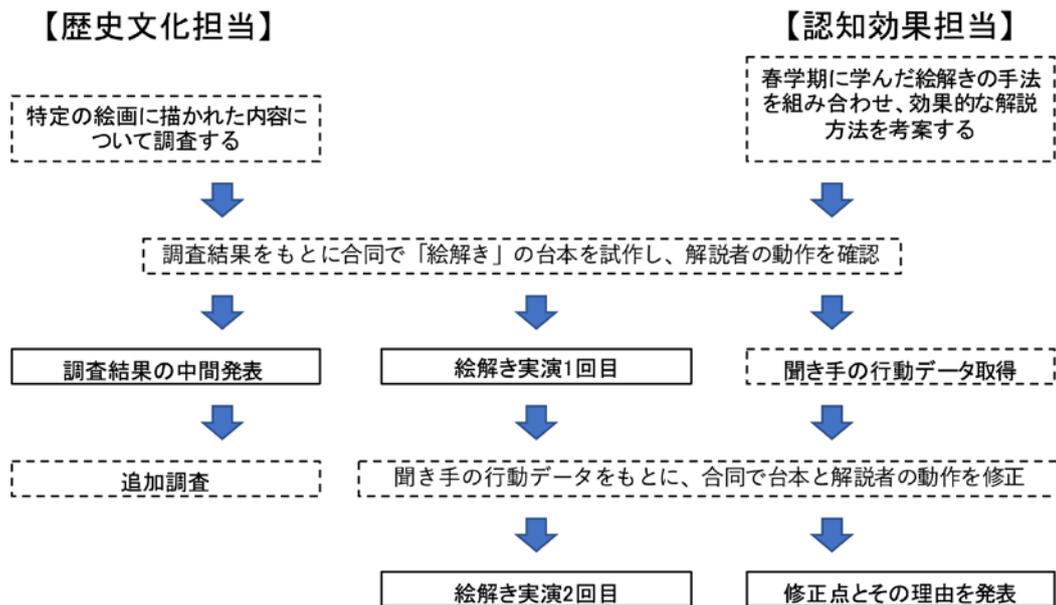
### <到達目標>

絵解きという総合芸術について理解し、絵画のコンテンツについて、他者に具体的に説明することができる。絵解きを始めとする、図像を介したコミュニケーションで用いられる戦略を理解し、その認知的効果を解明するために必要な、眼球運動等の行動データの取得・分析ができる。

### <授業計画>

ジョイント・リサーチⅠ：絵画に描かれた内容に関する歴史文化的背景を理解する。実際の絵解き動画を分析することによって、そこで用いられているグラフィック戦略を抽出・分類する方法を学ぶ。

ジョイント・リサーチⅡ：各人の興味に応じて、歴史文化担当と、認知効果担当の役割を付し、融合して5人程度のグループを作る。特定の絵画を題材に、ジョイント・リサーチⅠで習得した知識と手法をもとに下図のような流れで作業をすすめる。



### <成績評価基準>

ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ共通：平常点 25%、発表点 25%、期末レポート 50%

### <テキスト>

指定しない。

### <参考文献>

授業中に指示する。

**授業名：ジョイント・リサーチⅠ・Ⅱ 030**

**テーマ名：デジタルミュージアム京都の制作**

**担当者名：鋤柄俊夫・柳沢英輔**

### ＜概要＞

一般的なガイドブックでは紹介できていない京都の歴史と文化の魅力について、専門的な資料研究やフィールドワークによって得られた大量で多彩な「人・もの・場所・音」などの文化情報を、適切にデジタル化することで意味のある関係で融合かつ総合化し、京都に関心のある多くの人々にアピールするWEBサイトを「デジタルミュージアム京都」として制作する。

このときの重要な視点と新規性は、辞書的で解説的な従来のWEBサイトとは違い、「人・もの・場所・音」をストーリーでつなぐ構成にすることで、またそれによって創出される京都の魅力についても、グループ間でアンケートなどによる相互評価を行ない、文化の効果的かつ客観的な普及啓発の方法についても考えさせる。

### ＜到達目標＞

大量で多彩な京都の歴史文化情報を、現地調査や各種の資料調査によって総合的に研究する手法の会得および、文化の効果的かつ客観的な普及啓発の方法についての習得。

### ＜授業計画＞

ジョイント・リサーチⅠでは、京都の歴史とサウンドスケープの研究の基礎を学び、2人1組で既存のデジタルミュージアムと京都関係のWEBサイトの長所と短所について調査をおこない、その結果をふまえた予備実験的なWEBサイトを制作する。

ジョイント・リサーチⅡではそれぞれテーマを決めて4～5のグループをつくり、歴史文化担当、音文化担当、相互評価担当、WEBサイト制作担当などの役割を付し、京都文化の魅力の本質の探究と、デジタルデータの適切な活用によるその効果的な公開について探求しデジタルミュージアム京都の制作をおこなう。これにより、個人の役割と責任を自覚させつつ、協働でプロジェクトを完成させる方法と、文理融合型の共同研究を学ばせる。

### ＜成績評価基準＞

春学期は実践的な資料調査や演習をおこない、その間に適宜、授業の理解を確認するための提出物を求め、春学期末に予備実験的なWEBサイトの制作とまとめのレポートを課す。

秋学期は春学期の学習をいかした歴史文化の調査とWEBサイトの制作をめざし、中間発表と最終発表をふまえた期末レポートを課す。

### ＜テキスト＞

なし、適宜資料を配付する

### ＜参考文献＞

脇田晴子・修2008『物語京都の歴史』中公新書

京都観学研究会編2012『大学的 京都ガイド』昭和堂

鳥越けい子1997『サウンドスケープ その思想と実践』鹿島出版会

小松正史2006『京の音 一音で体感、京の風景』淡交社

## クラス分けに関する注意事項

1. 事前にシラバスをよく読んでおき、16のテーマの中から、興味のあるものを複数選定してください。
2. 説明会でのクラス紹介を聞き、第5希望まで絞り込んでください。
3. 希望調査はネット上でおこないます。希望調査の提出方法とクラス分けの方法についても1月10日（水）5・6講時の説明会にて説明しますので、必ず出席してください。

クラス	テーマ	担当者		
002	ビッグデータからの知識発見 ～経済・社会データの分析を通じて～	波多野賢治	深川大路	宿久洋
007	言語生態とGIS	沈力	川崎廣吉	
010	メディアの転換とトレンドの創造	田口哲也	山内信幸	石岡学
011	文化遺産の非破壊探査とリモートセンシングの応用研究	杉本裕二	津村宏臣	岸田徹
012	経済・金融データの分析・評価、及び様々な現象の予測・評価	川崎廣吉	浦部治一郎	
015	マルチモーダルインタラクションの動的構造 - コミュニケーションを科学する -	伊藤紀子	阪田真己子	
016	認知のクロスモーダル性から文化を考える	杉尾武志	星英仁	大塚幸生
017	データから文化・社会を読む	金明哲	鄭躍軍	
019	言語フィールドワーク演習	星英仁	沈力	田中雄
021	文化遺産の資源共有（世界遺産）化の方法と技術	津村宏臣	杉本裕二	岸田徹
024	教養としての「遊び」—カードゲームと歌謡の歴史—	深川大路	河瀬彰宏	福田智子
025	江戸時代の暮らしと文化	矢野環	福田智子	高橋美都
027	経済・経営データの計量経済分析	原尚幸	玉谷充	
028	現代の音楽のルーツをたどる—音楽文化の解体—	河瀬彰宏	石岡学	
029	「絵解き」の文化情報学的研究	中安真理	下嶋篤	
030	デジタルミュージアム京都の制作	鋤柄俊夫	柳沢英輔	